

「失われた書簡」における人物相関について

川部恵美*

Correlation in “Misplaced Letter to the Dead”

Megumi KAWABE

[Abstract]

The stone tablet that E. F. Wente found in Cairo in 1958, had two written and drawn sides. On the front side this was drawn a male, and on the reverse side this was written in hieratic. He considered it to be a “Letter to the Dead” and sketched it, after that, this stone tablet was lost somewhere. Therefore this is called “Misplaced Letter to the Dead”. He presumed that it dates back to the First Intermediate Period in ancient Egypt.

This petition letter was send to addressee from two senders. He explained that the first sender was the husband of addressee, but in philological construction, there is no solid ground for this presumption. In according to my philological analysis I considered the first sender to be a female. The purpose of this paper is to investigate the gender of the first sender, and to recreate the relationship between the characters in this letter. From this content I indicated the three possible correlations of the characters from the letter, and favored one among them.

1 はじめに

古代エジプト人は、この世での生を終え、死んで来世に旅立った故人と連絡を取ることができると思っていた。そのような思想のもと、生きている人々は書簡を送るという手段によって、死んだ人と生きている時と同様に意思疎通をとろうとしていた。このような、生きている人から死んだ人へ宛てた書簡は、「死者への書簡」と呼ばれている。この「死者への書簡」は、単に親しい者に自身の近況を知らせるためのものではなく、生きている人々の陥っている不運な出来事（遺産相続、病気、子どもが生まれぬ、伴侶に先立たれた悲しみなど）に関して、その不運な出来事を親類縁者である死者が取り除くように要求するためのものであった。新王国時代になると、生きている人々が抱えている悩みは神々や聖人へと送られた書簡（＝神託）に見られるようになったが、「死者への書簡」は、これに完全に取って代わられるということはなく、それと並行して存在し続けた。オドノグ (Michael O'Donoghue) は、「死者への書簡」が第6王朝末期から第21王朝にわたって存在し、古代エジプト人の思想や慣習が維持されてきたことをあらわしていると指摘している¹。「死者への書簡」は、古代エジプト文化の中で一定の役割を持っていたと思われる。

「死者への書簡」は、王族を除いた階層の人々によって書かれていた。書簡の中には、行政機関で働いていた人物が書簡を書いたことや、地方の高官と考えられる人物の墓から発見されていることから、ある程度、

* 関西大学文化財保存修復研究拠点 (RA)

(Institute for Conservation and Restoration of Cultural Properties, Kansai University, Japan)

1 Michael O'Donoghue, “The ‘Letters to the Dead’ and Ancient Egyptian Religion,” *Bulletin of the Australian Centre for Egyptology* 10 (1999), 92.

財力を持っていた人々によって書かれていた。現在、「死者への書簡」は 15 通が発見されており、これらの書簡はヒエラティックで書かれている。書簡の出土場所は、詳細であるものもあれば不明なものもある。

また、これら 15 通の書簡のうち 9 通が古王国末期から中王国初期の混乱期の頃に書かれたものである。この古王国末期に起こった政治的、社会的混乱から、当時の信仰や理想が脅かされ、第一中間期に入り、各地の地方貴族たちが勢力を持ちだすようになると、古王国時代に受け入れられていた伝統や宗教思想も問い直されるようになった。人々は混乱期における社会的無秩序によって、生きているこの世の中で正義が正しく行われないのではないかという思いからこの世における法廷や行政政府への不安を感じていた。このことが彼らの身に起きている諸問題を確実に解決するため、正義が正しく行われるようにするために死者との交流を促したとされている²。

15 通の「死者への書簡」うち、「失われた書簡」(“Misplaced Letter to the Dead”)と呼ばれるものが本稿での考察の対象である。1958 年、ウェンティ (E. F. Wente) は、カイロの古物商人が持っていた高さ 30 センチほどの石灰岩の石板の裏面に、第一中間期と思われる神官文字の書体で、縦 7 行にインクで書かれたものを発見した。表面には供物を捧げる男性が裏面と同様にインクで描かれている。

この書簡の出土地は不明である。彼は、その時カメラを持っていなかったため、神官文字を写し、これをヒエログリフに転写した³。その後、この石板は海外へ輸出され、行方不明となったため、「失われた書簡」と呼ばれるようになった。この書簡は、二人の送信人から一人の受信人へと送られた嘆願である。一人目の送信人は受信人である死者に、おそらく病気であろうと思われる自身の身体の苦痛を取り除くことを要求し、もう一人の送信人は、自身とともに、妻と子供のために受信人が何らかの理由によって闘うように要求している。「失われた書簡」をヒエログリフに転写、転字、翻訳し、注釈を行ったウェンティは、この「失われた書簡」に見られる夢に関して次のように述べている⁴。「死者への書簡」では、生者はその夢の中に受信人である死者が現れ、害悪をもたらしている邪悪な死者と戦う光景を見ることができ、このような「夢の潜伏」(incubation)の資料として、この「失われた書簡」は極めて古い段階の資料である。

ウェンティの解釈によれば、この書簡を書いた二人の送信人の最初の人物は受信人である死者と死別した夫となる(人物相関図 Fig. 4 を参照)。筆者は、ウェンティと異なり、この最初の送信人である人物が女性でないかと考えており、この書簡の内容から推測できる人物関係を整理し、その中から可能な相関関係を新たに示したい。また、「死者への書簡」には多くの女性が登場しており、彼女たちの家庭における状況、または死者となった女性に対する認識を垣間見ることができる。古代エジプトにおいて、王族以外の女性に関する資料は非常に少ないが、「死者への書簡」は女性が置かれた状況を示しており、古代エジプトの王族以外の女性に関する手がかりを我々に与えてくれる。このことから、この「死者への書簡」が他の資料と相互補完できる資料になり得るのではないかと筆者は考えている。

本論文では、第一に、「失われた書簡」の転字と翻訳をおこなう。第二に、この書簡における言語学上の問題点を検討していく。第三に、この書簡の内容を考察する。言語学的解釈と内容解釈を踏まえたうえで、この書簡の内容から考えられ得る送信人と受信人との人物関係を再構築し、提示する。

2 書簡の内容

この「失われた書簡」の最も重要な研究は、この書簡を発見し、記録を残したウェンティの手によるもの

2 Hisham El-Leithy, “Letters to the Dead in Ancient and Modern Egypt,” Zahi Hawass ed., *Egyptology at the Dawn of the Twenty-first Century*, Vol. 2 (Cairo, 2003), p. 304.

3 E. F. Wente, “A Misplaced Letter to the Dead,” *Orientalia Lovaniensia Periodica* 6-7 (1975-1976), 598.

4 *Ibid.*, 599.

である。彼の研究は後の研究者にとって基本的な文献として扱われ、「死者への書簡」を取り上げている研究者によって利用されている。他に、ケラー (Sharon R. Keller) による研究があるけれども、関心はアッカド語やウガリット語、ヘブライ語との比較に重点が置かれており、この書簡を正面から取り上げたものには必ずしもなっていない。筆者は、ウェンティを始めとする先行研究を再検討し、この書簡におけるいくつかの問題点を指摘したい。

2.1 転字

[] は欠落部分を示す。

- 1 *r dd (i)n Mrirtyfy n Nbtitf iw.t mi-ih in nd is hrt imnt*
- 2 [*hft ib*].*t mt ink mrt.t tp b^ch³ hr.i sb(i) hr rn(.i) n šb(.i)*
- 3 [*ts h*]ft -*hr.t s^cnh(.n.i) rn.t tp b^cdr mrt nt h^cw.i ih³h.t n(.i)*
- 4 *hft-hr.i m³.i^c h³.t(i) hr.i m rswt w³h.i n.t ht*
- 5 [*m-ht wnn šw wbn*]⁵ *grg(.i) n.t htp r dd in Hw³w n snt.f*
- 6 [.....] *n šb(.i) ts hft-hr.t n nhm ht r.t iw grt wh³.n(.i)*
- 7 [.....] *^ch³ hr.i^c h³ hr hmt(.i) hr hrdw(.i)*

2.2 翻訳

- 1 ネベティテフへ、メルイルティフィによる言葉。お元気ですか。西方の神はあなたの [心に従って] 歓迎しているのでしょうか。
- 2 見てください。私こそが地上であなたが愛した者です。私のために戦いなさい。私の名前を見守りなさい。
- 3 私はあなたの [前で呪文を] 間違えたりはしませんでした。私は地上であなたの名前を不滅にしています。私の肉体の痛み (= 病気) を終わらせなさい。そして、
- 4 私の目の前であなたが私のために祝福された者になりますように。夢の中で私のためにあなたが戦っているのを見ますように。私はあなたのために供物を捧げます、
- 5 [太陽が昇った後に]。あなたのために供物台を置きます。妹 (姉) ヘクウアウによる言葉。
- 6 [.....] 私はあなたの前で呪文を間違えたりはしませんでした。私はあなたへの供物を持ち去りませんでした。さらに私は世話をしました。
- 7 [.....] 私のために戦いなさい。また、私の妻と息子のために戦いなさい。

2.3 分析

ウェンティ自身も判断に苦しんでいるところが見られる。その後、ケラーがこの書簡の分析をおこなっているが、十分に行われているとは言えない。筆者は、ウェンティの研究で不確かとなっている点の再検討をおこない、新たな視点を示したい。

1 行目

r dd (i)n は、第 12 王朝時代に書かれた「ヘカナクテ書簡」と呼ばれるテキストの冒頭において、同様の

⁵ *Ibid.*, 598.

形で使用されている⁶。ウェンティは、この「ヘカナクテ書簡」を例にとり、「Nによる手紙」(“A communication by N”)と訳している。パーキンソン (Richard B. Parkinson) は、「Nからのメッセージ」(“A message from N”)⁷と、ケラーは、「Nによって言われること」(“Said by N”)⁸とそれぞれ訳している。*r dd (i) n Mrirtyfy n Nbtitf*は、直訳すると「ネベティテフのために、メルイルティフィ (*Mrirtyfy*) によって言われることに関して」と訳することができる。*r dd*の*r*は前置詞で目的、未来をあらわしており、メルイルティフィはネベティテフに対して、今まさに書簡に書いてある内容を言おうとしている。最初の文が誰から書かれたものなのかを示していることから、筆者はこの文を「ネベティテフへ、メルイルティフィによる言葉」と訳す。

メルイルティフィと呼ばれる人物が男性であるのか女性であるのかは決定詞が書かれていないため、特定するのは難しい。ウェンティは、ランケ (H. Ranke) の *Die Ägyptischen Personennamen* から、この文字に極めて近い例を引用している。彼は、この名前に女性の例がある⁹一方で、石板の表側に描かれている人物が男性であることから、彼はメルイルティフィをこの表側に描かれている男性と考え、一番目の送信人を男性であると判断している¹⁰。しかし、筆者は推測にとどまるとはいえ、一番目の送信者メルイルティフィを指していると思われる2行目の「あなたが愛した者」につけられている決定詞が女性となっていることから、メルイルティフィは男性ではなく女性であると考ええる。

(i)nに関して、ウェンティがヒエログリフに転写したものでは、*i*にあたる文字が描かれておらず、*n*のみが描かれている。この*n*は、そのあとの文字である*nd*のふり仮名のようにも見える。ウェンティは、この*n*を疑問文の*in*と、*nd*の両方の役割を担っているとしている。この文は前の挨拶文に続いて、送信人が死者である受信人に対して来世で幸せに暮らしているのかを訊ねている挨拶文である。

2行目

*mt*は、中期エジプト語において、相手の性数に関わりなく*mk*と統一されて使われるようになる¹¹。それ故、ここで*mt*が使われていることから、中王国時代以前の書簡である可能性が高い。

*mrt.t*に関して、ウェンティはこの単語の最後に描かれている、座っている女性の文字を二人称女性単数の接尾代名詞*.t*の決定詞 $\triangle \text{𓆎}$ と示している。彼自身はこの書き方が、後期エジプト語になるまで証明されていないと言及しており、参考文献としてクレール (J. J. Clère) の論文を挙げ、二人称女性単数の接尾代名詞*.t*に座っている女性の文字を伴っている書き方があることを述べている¹²。座っている女性の文字をもつ二人称女性単数の接尾代名詞*.t*が、後期エジプト語において使用されたことは明らかである¹³。しかし、

6 Klaus Baer, “An Eleventh Dynasty Farmer’s Letter to His Family,” *Journal of the American Oriental Society* 83-1 (1963), 2.

7 R. B. Parkinson, *Voices from Ancient Egypt: An Anthology of Middle Kingdom Writings* (London, 1991), p. 142.

8 Sharon R. Keller, *Egyptian Letters to the Dead in Relation to the Old Testament and Other Near Eastern Sources* PhD: (New York University, 1989), p. 187.

9 H. Ranke, *Die Ägyptischen Personennamen*, Vol.1 (Glückstadt, 1935), p. 155. この人物の読み方は、まだ確定されていない。

10 Wentz, *op. cit.*, 597.

11 吹田浩、『中期エジプト語基礎文典』、創英社、2003年、144頁。

12 J. J. Clère, “Deux Statues ‘Gardiennes de porte,’” *Journal of Egyptian Archaeology* 54 (1968), 139-40.

13 A. Erman und H. Grapow, *Wörterbuch der Aegyptischen Sprache*, Bd. 5 (Berlin, 1971), p. 337;

Rainer Hannig, *Großes Handwörterbuch Ägyptisch-Deutsch*, (Mainz, 2006), p. 1015.

中期エジプト語では、後期エジプト語で使用されていたこのような書き方は見られないと考えられている。前述したクレールの論文で使われている資料は、ラムセス朝時代のものであり、後期エジプト語で書かれている。「失われた書簡」が書かれた年代は、第一中間期に推定されており、ラムセス朝時代の資料と同じような書き方で書かれていたと解釈することは難しいのではないかと筆者は考える。

また、この「あなたが愛した者」の転字については、ウェンティは *mr(w)t(y)* としている。この転字に関しては特に述べておらず、どのような文法構造を彼が考えていたのかわからない。筆者は、この文字をウェンティが転字で示した *mr(w)t(y).t* ではなく *mrt.t* と転字し、関係形の完了・能動態と解釈する。この単語の最後に描かれた、座っている女性の文字は、二人称女性単数の接尾代名詞 *.t* を意味する文字ではなく、女性の決定詞として解釈する。このことから、ここで述べられている「あなたが愛した者」とされる人物は、女性である可能性が高い。

3行目

3h (アク) とは、人が埋葬の時に儀式によって呪力を得て、神々しい姿となった存在である。アクの意味は、名詞においては「霊」、動詞では「霊となる」(“become a spirit”)、形容詞では「神々しい、素晴らしい、輝かしい、有益な、役に立つ」などの意味で解釈される¹⁴。ウェンティは「霊となってください」(“please become a spirit”)と訳し¹⁵、パーキンソンは「祝福された者としてあらわれますように」(may you appear as a blessed one)として訳し¹⁶、ケラーは、ウェンティと同じく「霊となってください」と訳している¹⁷。ウェンティは *3h* の解釈について、「私の目の前で私のために有益に行動しますように」と訳される可能性もあるが、次に述べられている話が夢で死者が霊となって出現することから、「霊となってください」と訳している。

3行目から4行目にかけての文、*ih 3h.t n(i) hft-hri* は、一人称共通単数の接尾代名詞 *.i* が省略されている。この接尾代名詞 *.i* は書かれないことが多い。ここでは *.i* を補い、「私のために」と訳す。非前接的不変化詞である *ih* は先行する行為や状況を受けて使われ、仮定法とともに使われる¹⁸。筆者は、この文が仮定法として、死者がアクとして神々しい姿になってほしいという願望を述べていると考え、「そして、私の目の前であなたが私のために祝福された者になりますように」と訳す。

4行目

m3.i は仮定法で解釈している。

m3.i ʕh3.t(i) hri において、*ʕh3.t(i)* は前の動詞 *m3* の目的語を修飾しており、状況をあらわしている状態形である。

4行目と5行目にある言葉、*w3h.i* と *grg.i* に関して、ウェンティとケラーは「私は捧げるでしょう」「私は置くでしょう」と未来時制“will”で訳している。パーキンソンは、意志未来をあらわす“shall”で訳している。筆者は現在時制と解釈し、「私は捧げます」と訳したい。

14 Raymond O. Faulkner, *A Concise Dictionary of Middle Egyptian*, (Oxford, 1962), p. 4.

15 Wente, *op. cit.*, 597.

16 Parkinson, *op. cit.*, p. 142.

17 Keller, *op. cit.*, p.187.

18 吹田浩、前掲著、73頁。

19 同上、90頁。

snt は「姉、妹」の意味である。「姉」と「妹」を区別するために、*snt* の後に、*šrr* 「小さい」や *wr* 「大きい」などの言葉がつけられることがある。この書簡では、「姉」か「妹」のどちらを指しているのかは、判明しない。

また、第6王朝の書簡であると推定されているカイロリネンの書簡は、*snt ddt hr sn.s* 「兄に言う妹」と冒頭で記述している。この書簡に書かれている *snt* は、「姉、妹」という意味ではなく、「妻」として使われている²⁰。日本でも「妹背」という言葉が、「妻」や「妹」（もしくは「姉」）を意味するように、古代エジプトでも、「兄、弟」や「姉、妹」の言葉が、愛情を示す言葉として「夫」や「妻」の意味で使われていたのである。

この書簡において、*snt* が「姉・妹」の意味で使用されているのか「妻」の意味で使用されているのか決めることはできない。

3 考察

送信人はメルイルティフィとクウアウ、受信人はネベティテフという名前の人物である。送信人の仕事や肩書きは、この書簡に記されていないため、不明である。この書簡は、1行目から5行目の半分までがメルイルティフィからの嘆願で5行目の半分から7行目までがクウアウからの嘆願で構成されている。この書簡は、1番目に宛名と送信者名、2番目に送信者への挨拶文、3番目に問題解決への要求、4番目に問題解決に対する報酬といった構成で成り立っている。

書簡の主な内容は、第一番目の送信人であるメルイルティフィが受信人であるネベティテフに対して、自分の体の痛み（＝病気）を取り除くように要求していることである。加えて、第二番目の送信人であるクウアウは、クウアウ自身と自分の妻、子供のために戦うことをネベティテフに対して要求している。ただし、クウアウの記述では、誰に対して戦うのか、そしてクウアウ一家にどのような不幸な出来事がおこったのかは書かれていないため、不明である。

死者に病気を取り除くように要求している書簡は、この書簡のほかに「カイロボウル」と呼ばれる書簡がある。送信人であるデディという女性が、受信人で夫であるアンテフに召使いの病気を取り除くように要求している。この「カイロボウル」の書簡において元凶とされている人物は「あらゆる死んだ男女」である²¹。「死者への書簡」では、生きていた人々に危害を加える人物が特定されない場合は、不特定の死者が元凶として示されるのであるが、この「失われた書簡」では、元凶とされる特定の人物も不特定の死者という記述もどちらも書かれていない。特定の人物が示されていない場にもかかわらず、不特定の死者の記述もしていないのは、この書簡のみである。

古代エジプト人は、病気の治療に関して様々な処方が書かれた資料を残している。病に侵されるというのは、敵意を持った悪神や悪霊のような邪悪な力を持った者の仕業あるいは間違った行為に対する罰であるにちがいないとされていた²²。メルイルティフィは、書簡の中で「あなたの前で私は言葉（呪文）を間違えたりしませんでした。私は地上であなたの名前を不滅にしています」と述べている箇所がある。この文は、メルイルティフィがネベティテフの葬祭儀礼をそつなくおこなったということを示している²³。メルイルティ

20 A. H. Gardiner and K. Sethe, *Egyptian Letters to the Dead* (London, 1928), p. 1.

21 Gardiner and Sethe, *op. cit.*, pp. 7-8.

22 イアン・ショー、ポール・ニコルソン著、内田杉彦訳、『大英博物館古代エジプト百科事典』、原書房、1997年、62頁。

23 Parkinson, *op. cit.*, p. 142.

フィは、儀礼の際に読まれる呪文を正確に読んだことを述べており、それゆえ、病気の原因が自分の過ちに対する罰ではないことを主張しているように見える。また、古代エジプトでは、名前を非常に重要なものであると捉えていた。名前は、「カ」「バ」「アク」「影」などから成る人間の構成要素の一つであり、死後も生き続けるために必要であると考えられていた。死者は墓や彫像などに名前が刻まれることによってこの世でも存在することができる一方で、名前が削り取られると、その名前を持つ死者の存在そのもの葬り去ることに等しいと見なされていた²⁴。もし墓や彫像に書かれている名前が削り取られ、存在そのものが葬り去られてしまうと、死者は供物を受けられなくなり、永久に消滅してしまうと考えられていた。

古代エジプト人にとって、病気は邪悪な心を持った悪神や悪霊が引き起こすものであり、病気を治すためには、呪文を唱えて悪神や悪霊を追い払うことが必要であると考えていた。また癒しの力をもつとされた神々に対して、祈りを捧げたり手紙を書いたりすることもあった²⁵。メルイルティフィは、身内である死者が悪霊と戦うことによって、自身の病気は治ると考えていた。「カイロボウル」の書簡においても、この「失われた書簡」と同じく、送信人は受信人が元凶となる死者たちと戦うことを要求している²⁶。「死者への書簡」では、病を治すために呪文を唱えたり、癒しの力を持つ神々に祈りを捧げたり手紙を書いたりするかわりに、自身の身近な存在で、アクとなって力を持っていると考えられている死者が確実に病のもととなる元凶を倒すという方法をとっていたのである。

また、送信人メルイルティフィは自身の病気を治すために戦う受信人ネベティテフの姿を確認するために、自身の夢に出てくるようにも要求している。生きている者と神々との仲介者としての役割を与えられていた死者は、生きている人々の夢を通じて現れ、接触あるいはコミュニケーションが行われると考えられていた²⁷。ウェンティは、夢で死者が悪意のある敵(死者)と戦うところを見るという発想が、ヘレニズム期に現れる夢に関する記述と類似していることから²⁸、メルイルティフィがネベティテフの戦う姿を夢で見るために墓で一夜を過ごしたと解釈している。そして、夢で彼女が悪意ある敵と戦う姿を確認してのち、太陽が昇るとすぐに供物を捧げると述べている。古代エジプトでは、夢は神々の意志を伝え、未来の出来事についての吉凶を示すと考えられており、末期王朝以降になると夢を通して神託を受けるために神殿の中で眠ることが通常となり²⁹、プトレマイオス朝時代になると、病人は神に治療されることを願って神殿の中で一夜を過ごしていた³⁰。末期王朝以降に現れるこの習慣は、この第一中間期の書簡とは1500年以上も時が隔たっているために、同様の習慣が行われていたと速断することはできない。

ウェンティが述べている、墓で一夜を過ごす行為に関連して、王の正当な王位継承を主張するためのプロパガンダである新王国時代のトトメス4世の夢の話がある。彼はスフィンクスの側で眠りについた時、夢の中でスフィンクスの周りの砂を取り除けば彼がエジプト王になると告げられる。ここで注目されるのは、トトメス4世が宮廷においてではなく、スフィンクスの側で眠ることにより、彼に啓示が下るという部分である。トトメス4世の夢の啓示を考慮するなら、この失われた書簡における送信人が受信人ネベティテフの墓で一夜を過ごした可能性は排除されない。ただし、新王国時代も本稿が論じている第一中間期とはまた時代

24 ショー、ニコルソン著、前掲著、381頁。

25 エヴジェン・ストロウハル著、内田杉彦訳、『図説 古代エジプト生活誌 下』、原書房、1997年、234頁。

26 Gardiner and Sethe, *op. cit.*, p. 7.

27 J. Bains, "Society, Morality, and Religious Practice," Byron E. Shafer ed., *Religion in Ancient Egypt* (London, 1991), p. 171.

28 Wente, *op. cit.*, 599.

29 ショー、ニコルソン著、前掲著、62頁。

30 Wente, *op. cit.*, 599.

が離れており、状況証拠にとどまる³¹。

メルイルティフィの性別、ネベティテフとの関係が明確に述べられていないため、書簡から述べられる人物関係を明確に限定することはできないが、考えられ得る関係を提示することはできる。筆者ははじめに、3つの相関図を提示したい。一つ目は、メルイルティフィとネベティテフ、そしてクウアウの3人は兄妹(もしくは弟姉)であるという関係である(Fig. 2)。二つ目はメルイルティフィとネベティテフが姉妹であり、クウアウは二人の夫であるという関係である(Fig. 3)。三つ目は、クウアウとネベティテフが兄妹(もしくは弟姉)であり、メルイルティフィがクウアウの妻であるという関係である(Fig. 4)。

第19王朝時代の書簡であると推定されている「ライデンパピルス」の書簡は、送信人の男性が受信人である亡くなった妻アンクイリイに宛てて書いた書簡である。この書簡の中で、送信人である夫は、妻アンクイリイが死んだ悲しみを述べている。最後の文で、彼は妻アンクイリイの姉妹のうちの一人名とはまだ結婚していないと述べている³²。「死者への書簡」において、受信人となる人物は送信人の親または配偶者であり、兄弟や姉妹を受信人としている書簡は現在の時点で発見されていない。送信人は、あの世で悪意を持つ死者に打ち勝つことができるほどの強力な力を持つと考えられている死者を受信人として選んでいる。例えば、第6王朝に推定されている「カイロリネン」の書簡では、受信人の夫が元凶となる人物に対して裁判を起こすように要求している³³。さらに、送信人である妻は夫に対して、夫の父親にも協力してもらうように呼びかけている。

以上のことから、兄弟姉妹に宛てて書かれた「死者への書簡」が他に現れていないこと、そして妻が死んだ後に彼女の姉妹と再婚することがあったという記述から、クウアウとネベティテフは夫婦であったけれども、ネベティテフの死によって彼女の姉妹であるメルイルティフィが後妻に入ったと考えれば、二つ目の相関図の可能性が高いと考える³⁴。

4 おわりに

以上のように、「失われた書簡」において、いくつかのことばにおいて再検討がおこなわれるべき問題点が明らかとなった。ウェンティは、第一番目の送信人であるメルイルティフィの性別に関して、このメルイルティフィという名前が中王国時代において女性の名前として存在していた例を挙げながらも、石板の表側に供物を捧げている男性の描写があること、そして彼が儀式に参加しており、埋葬の儀式というのは通常男性によって行われることから、メルイルティフィの性別は男性であり、受信人ネベティテフの夫であると解釈している。また、2行目の「あなたが愛した者」の言葉に関しては、この言葉の最後の座っている女性の文字を先行する二人称女性単数の接尾代名詞*.i*に伴う決定詞とし、メルイルティフィを石版に描かれた男性として解釈している。

石板の表側には、何か性別が判断できる表現もないため、最初の送信人である人物が描かれた可能性もあるが、もう一人の送信人であるクウアウが男性であることは明らかである。彼がネベティテフの葬祭儀礼に

31 夢への言及に関しては、パピルス・ナグ=エル=デイル N3737 の書簡にも出てくる。送信人であるヘニが受信人である死者で父親のメルルウに対して、ヘニ自身が見る悪夢を見ないようにするために来世で働きかける要求を行っている場面がある。W. K. Simpson, "The Letter to the Dead from the Tomb of Meru (N 3737) at Naga el-Deir," *JEA* 52 (1966), 41 を参照。

32 Gardiner and Sethe, *op. cit.*, pp.8-9.

33 *Ibid.*, p. 1.

34 例に挙げた第19王朝時代と推定されている書簡は、「失われた書簡」が書かれたとされている第一中間期とは年代が離れているが、一つの可能性として考えたい。

関わっていたことから、石板に描かれている男性がクウアウである可能性もあるため、メルイルティフィの性別を速断することは避けるべきであると考え。「あなたが愛した者」(*mrt.t*)では、座っている女性を決定詞と解釈することによって、この「あなたが愛した者」と送信人メルイルティフィを同一人物として捉えることができると筆者は考える。この送信人を女性と仮定すれば、送信人メルイルティフィと受信人ネベティテフ、そしてもう一人の送信人クウアウとの関係は、ウェンティの解釈とは異なったもの (Fig. 2) となる。

「失われた書簡」の内容を再検討し考察することによって、古代エジプト人の家族構成、婚姻関係がどのようにおこなわれていたのか、女性の儀礼への関与がどの程度あったのかという、新たな視点が開けることになった。書簡の内容から、ネベティテフに対して女性の送信人も何らかの儀式を行っていたことが想定できる。儀式を遂行する者は通常、男性であると考えられており、この事例は古代エジプトの中でめずらしいものである。

古代エジプトの葬祭儀礼の資料は、男性によって書かれた文書に偏っており、女性が儀礼にどう関与していたのかを読み取ることは極めて難しい。しかし、「死者への書簡」は、男性だけではなく女性も利用していた資料であり、当時の人々の状況や感情がストレートに書かれている。この「失われた書簡」において、女性が儀礼に関して何らかの関与があったと考えられる記述が見られることから、今後、古代エジプトにおける女性の葬祭儀礼への関与を再検討する必要があると考える。

本研究は、「文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 20 年度～平成 24 年度）」によって行われた。

Fig. 1 メルイルティフィ、ネベティテフ、クウアウが兄妹の場合

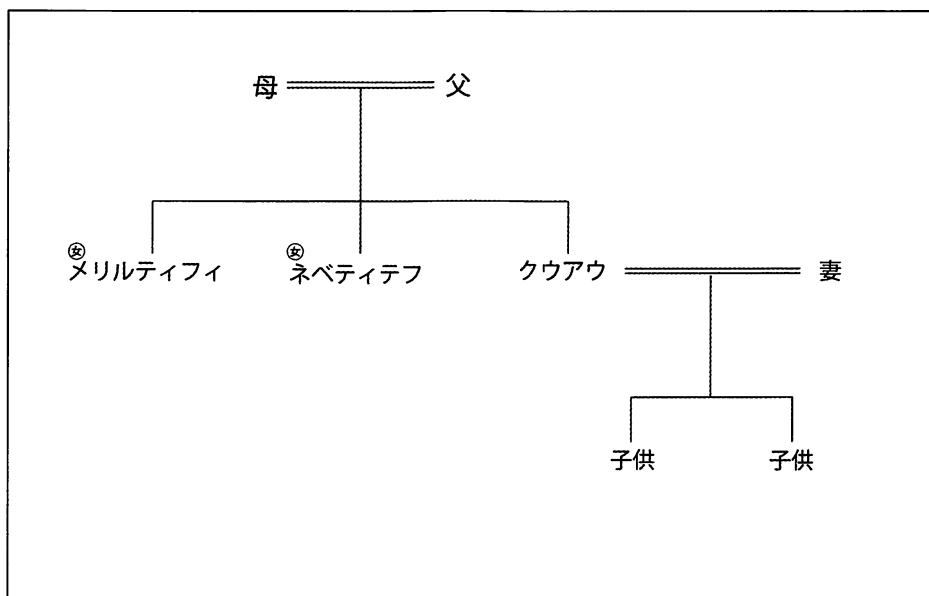


Fig. 2 メルイルティフィとネベティテフが姉妹で、クウアウが配偶者の場合

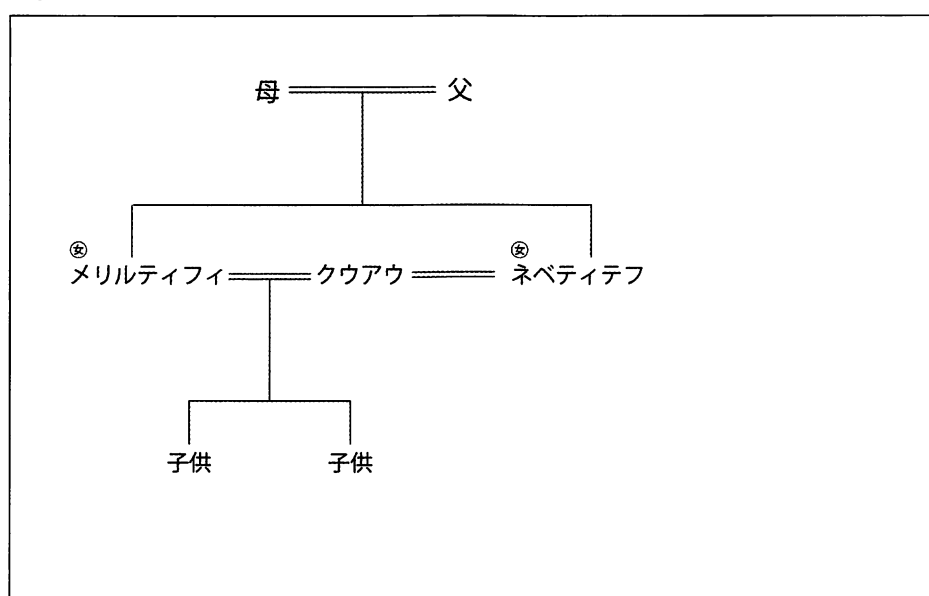


Fig. 3 ネベティテフとクウアウが兄妹で、メルルティフィがクウアウの妻である場合

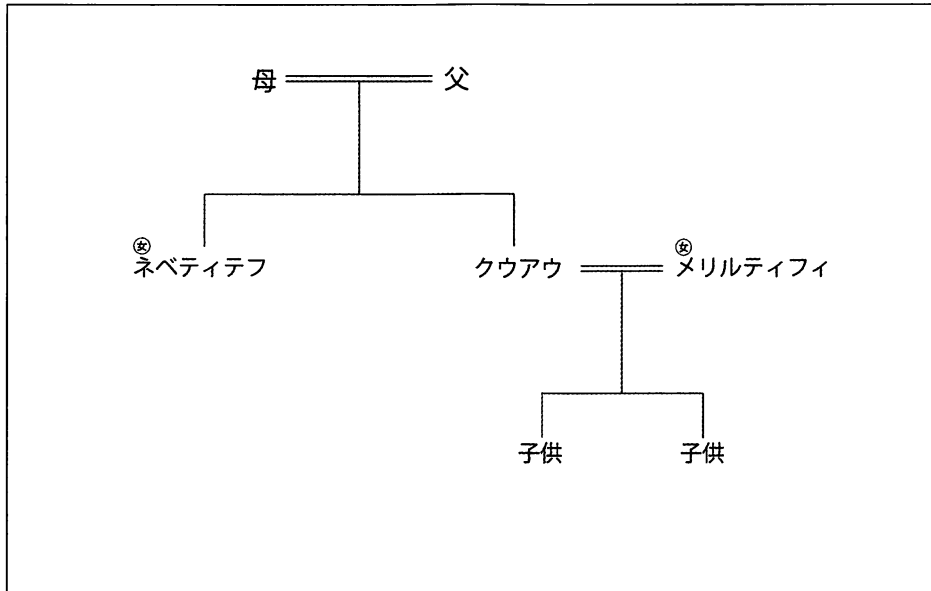


Fig. 4 ウェンティが解釈する相関図

